

白と黄

AI脳実験

春日信彦

姫の神毛

8月3日（土）ハサミの日。鳥羽は、寮の東側に新しくできた珈琲館でモーニングの食事を終わると、ぼんやりとゆう子姫のことを考えていた。最近では、珈琲館は息抜きの場所になっていた。ここで物思いにふけることは、鳥羽にしてみれば、唯一の贅沢だった。ただ、不覚にも、昨日、美緒にこの隠れ家を発見されてしまった。”どうか、今日は美緒に出会いませんように”と願いながらコーヒーをすすっていた鳥羽だったが、窓の外に白いTシャツからピンクブラをチラつかせている美緒の姿を見つけてしまった。”神様、どうか目があいませんように”と祈願したその時、ダイジャににらまれるかのように、美緒の大きな眼球から発せられた悪魔光線が鳥羽の小さな眼球に突き刺さった。一瞬、顔が引きつったが、白旗をあげるかのように笑顔を作ってしまった。

美緒は、勝ち誇った女将軍のようにニコツと笑顔を見せると巨乳をブルルン～ブルルン～揺らしながら珈琲館に入ってきた。巨乳の爆風にホホを殴られた男性客の眼球は、一斉に美緒の巨乳に向かって飛び出した。鳥羽は、友達付き合いがいいほうではなかったが、決して人嫌いではなかった。でも、美緒だけは苦手で、極力避けたいタイプの一人だった。一見するとパツパラパ～の能天気に見えるのだったが、弱点を見抜く洞察力があり、しかも弱点を鋭いナイフで突き刺すような容赦ない攻撃をするからだった。昨日のティールームでのことをふと思い出した。特に、ゆう子姫に関する話題になると戦国武将が天下を取るかのようにビシバシ攻撃してきた。

このままでは撃沈されると思い、平原遺跡で出土した三種の神器から考えて、平原古墳は神功皇后（じんぐうこうごう）の王墓ではないか？という説がある、といったところ。突然、目を輝かせて、「きっとそうよ、美緒もそう思う。46,5センチの日本最大の内行花文鏡が出てきたんだから。それにさ～～、アマテラスの孫のニニギが三種の神器を持って降臨したところは、宮崎の高千穂じゃなくて、糸島の高祖山だと思うのよ。美緒って、鳥羽君とすっごく話が合うのよね～～。赤い糸で結ばれているのかも～？」と食いついてきたのには驚いた。水を得た魚のようにドヤ顔で神話の独演が始まり、話が盛り上がった。英語や数学はからっきしダメな美緒だったが、日本の歴史に結構詳しいのには驚いた。人は見かけによらないとはこのことだ、と感心してしまった。

美緒は鳥羽の正面に腰掛けるといつものなれなれしい口調で話しかけてきた。「やっぱ、ここだったか。鳥羽君の動きって、わかりやす〜。マヌケ顔で、ボ〜〜と、ナニ、考えてたの？ゆう子先輩のこと？」的を射た言葉にグサグサツときた。美緒と話をしていると長話になるとさっさと立ち去ろうと思うが、いつも引き留められて話に付き合わされていた。というのも、美緒はリッチでいつもコーヒー代をおごってくれるからだった。鳥羽は、おごってもらえると聞くとつい甘えてしまった。バイトの時間がない鳥羽は、いつも、金欠病で、いつの間にか、美緒が”金のなる木”に見えて、しがみついていた。

凶星の美緒の言葉が癪に障ったが、気持ちを隠すように重たい口を開いた。「まさか。毎日、忙しくて、大変なんだ。今、ちょっと息抜き。今日も、午後から資料整理」美緒は、見え透いた嘘は通用しないというような顔つきでじっと鳥羽を見ていた。「へ〜。そう。それじゃ、ゆう子先輩の話は聞きたくないってことか〜。そんなに、忙しいんだったら、さっさと帰ったら」鳥羽は何か意味ありげな話しぶりをした美緒の顔をそっと覗き込み、少し考え込んだ。このタイミングで帰ったほうが得策のように思えたが、ゆう子姫についての話があると聞くと興味をそそられてしまった。

気まずそうに返事した。「まあ、忙しいといっても、今すぐってことではない。もう一杯飲もうかな〜。美緒さんもどうぞ。今日は、僕がおごるから」美緒は、素直に聞きたいといえどいいのに素直さが無いんだから、と思ったが、サービスしてやることにした。「そお〜。おごってくれるの？そんなに見栄張らなくてもいいのに。ビンボ〜学生なんだから。美緒がおごってやるって。それより、ゆう子先輩の話、聞きたいでしょ〜」鳥羽は、ゆう子姫の話と聞いてヨダレが出てきたが、グツと我慢して一呼吸おいて返事した。「いや、まあ。ゆう子姫は、いかがお過ごしかな〜、って思っていたんだけど。ムチャをされなければいいんだがな〜」

美緒は、アイスレモンティーをストローでチュッと吸うと返事した。「今度の土曜日、ゆう子先輩のウチに泊まるの。積もり積もった話があるし。ゆう子先輩に何か伝えたいことある？」伝えたいことといっても特になかった。あえて言うならば、デモには参加しないように伝えてほしかった。「特にないけど。デモはほどほどに、って伝えてくれ。デモなんて、ゆう子姫には、似合わないんだよな～～。ゆう子姫には、日本舞踊とか・・・」鳥羽は、ポカ～ンと口を開けて、ゆう子姫が桜の木の下で優雅に舞う姿を想像していた。アホは死んでも治らない、と思った美緒は、ちょっとからかってやることにした。「あ、そう。先輩のアレ、捨てちゃったの？」鳥羽は、アレと聞いて一瞬首をかしげたが、言いたいことがピンときた。「あ～、アレね。家宝にしてるさ。美緒さんには、感謝してるよ」美緒はうなずき、笑顔を作った。

鳥羽にとって、アレは、三種の神器の一つであった。密かに、アレは八咫鏡（やたのかがみ）と思っていた。毎日、箱を目の前に置き、手を合わせ、”ゆう子姫が健やかに過ごされますように”と神にお願いしていた。一月に一度、箱から出しては、甘い香水の香りをかいでいた。美緒は、マジな顔つきで話し始めた。「それはよかった。あ～いうことは、二度としたくない。鳥羽君のためと思って、命がけでネコババしたんだから。あの時、すつごく、ビビったんだから。美緒って、どちらかっていうと、尽くすタイプなのかな～。鳥羽君に、そんなに感謝されると、こそっと、アレをもらってきてあげようかな～」ゆう子姫のショーツだけでも幸運の神器と思っていたが、さらに、ゆう子姫の神器をいただけるのかと思うと興奮してきた。「アレって？まだ、何かいただけるのでしょうか？美緒オジョ～様」

周りにお客がいなのを確認した美緒は、もっとからかってやれと思い、お風呂の話をすることにした。「女子って、お風呂で遊ぶのが、好きなのよね～。シャボンをたくさん作って、シャンプーマットまでつくちゃうの。そいで、お互い、洗いっこすんの。ちょっと、くすぐったいんだけど、楽しいのよ。先輩って、洗ってあげると、キャーキャー言っって、喜ぶんだから」鳥羽の頭には、真っ白なシャボンに包まれたゆう子姫とブルル～ン・ブルル～ン巨乳を揺らす美緒の姿が浮かび上がっていた。興奮し始めた鳥羽は、すぐにでも続きの話を聞きたかったが、冷静さを取り戻し、軽く返事した。「そうですか。女子は、お風呂が好きなんですね」鳥羽の紅潮した顔を見た美緒は、心でクスクス笑い、話を続けた。「美緒のって、バカデカでしょ。先輩ったら、両手で、ギュッギュギュッギュ揉みながら、デカすぎて洗えないって言うの。まったく、口が悪いんだから。悔しいから、抱きついて、グイグイ先輩の胸に押し付けてやるの」

鳥羽にとっては、ちょっと話が過激すぎた。ヌードの想像がますます膨らみ、股間が膨らみ始めていた。「楽しそうですね。そんな話、初めて聞きました。女子と話す機会がありませんので。仲がいいって、いいですね」鼻息が荒くなった鳥羽を見ていると噴き出しそうになったが、もっと、喜ばしてやることにした。「先輩も負けてないのよ。アソコ洗ってやるって言って、ゴシゴシ手のひらで、アソコをこするんだから。こっちも、負けてられないから、やり返したりして、キャツキャ、キャツキャ、バカ騒ぎスンの。ほんと、二人とも、アホなんだから。笑っちゃうでしょ」鳥羽の股間はこんもり膨らんでいた。鳥羽にとっては、笑い話ではなかった。美緒が言うアソコとは、アソコしかないと思い、クローズアップされたゆう子姫のアソコを想像してしまった。

美緒は、からかうかのように反応を確かめてみた。「あきれたでしょ。先輩も、結構アホなのよ。これ以上、こんなバカ話、聞きたくないでしょ。もう、やめる？」ここまで聞かされたなら、やめられるわけがないと言いたかったが、コーヒーをすすり喉を潤して、冷静に返事した。「いや～、ゆう子姫も、ヤンチャなところがおありなんですね。いいことじゃないですか。愉快的話を聞かせてもらって、ありがたい。僕は、女子のことは、全く知らないから、参考になります」カラになったカップを見た美緒は、もう一杯、勧めた。「のど、乾いたでしょ。もう一杯どう？」カラになったカップを確認した鳥羽は、アイスミルクティーを注文した。

美緒は、レモンスカッシュを注文した。「あ、そう。さっきのアレのことだけど」美緒が考えているアレは、口に出して言えるようなものではなかった。ちょっと声を小さくして話し始めた。「今度、泊まるじゃない。そいで、お風呂にも一緒に入るじゃない。だから、こそっと、アレを失敬しようかなと思ってるの」鳥羽は、いったい何を言いたいのかさっぱりわからなかった。ショーツのほかにもらえるものといえば、ブラではないかと思ったが、ちょっとネコババしにくいのではないかと思えた。お願いしてもらえるものでもないと思えた。というのは、ゆう子姫のCカップブラは、美緒のIカップのバストに合わないからだ。

何を今度はネコババしてくれるのだろうかと考えていると美緒が話を続けた。「ちょっと、口では言えないのよね。ほら、アソコのアレを2, 3本失敬してこようかなと思って。鳥羽君、欲しくない？欲しくなかったら、いいんだけど。すっごく、ネコババって、気を使うのよね。ドキドキするんだから。いらない？」2, 3本と聞いて髪の毛なのかなと思ったが、髪の毛であれば、アソコとは言わないと思い、まさかと思った。まさか、アソコのアレって？アソコの？ゆう子姫のフサフサ盛り上がったアソコのケを想像した途端、ゴックンと生唾を飲み込んだ。こんなチャンスは二度とないと思った鳥羽は、勇気を出してお願いすることにした。「2, 3本もいただけるのですか。まったくかたじけない。天国まで家宝としてお持ちいたします。ぜひ、お願い申し上げます。美緒オジョ〜様」

意味が通じたと思った美緒は、笑顔で返事した。「了解いたしたぞ。鳥羽君のお願いとあらば、命がけで頑張る。任せて。先輩って、すっごくモサモサだから、意外とうまくやれそう。これで、三種の神器の2つ目がそろうってことね。それに、もっと、二人の秘密を話してあげてもいいんだけど、ここじゃね〜。あ、もう、お昼じゃない、お腹すいちゃった。鳥羽君、お昼は？」鳥羽は、腕時計で時刻を確認した。「あ〜、もうこんな時間か。弁当買って帰ろうかな〜」美緒が、即座に食事を誘った。「土曜日じゃない。外食したら。美緒がおごってやるから〜。チャンプ・カフェ、っていうハンバーグのおいしいところ、知ってんのよ。行かない？」鳥羽は、一応は断るべきだと思ったが、頭は、うなずいていた。

決死の絆

8月4日（日）橋の日。鳥羽は朝食を終えると、安田から昨日の夕方にかかってきた電話を思い出した。用件は、ちょっと相談したいことがあるということだった。そこで、さしはら旅館に午前11時頃に伺う約束をしていた。午前10時30分になると、早速、Tシャツにライダージャンパーを着こみ、5階から一気に階段を駆け降りた。駐輪場の愛車、スズキアドレス110に駆け寄るとメインスイッチにキーを差し込み、カチッとシートを開けた。鳥羽は、トランクから赤いジェットヘルメットを右手でヒョイと取り出し、白のドライバークラブをした。一呼吸するとサイドスタンドをカチ〜〜ンと右足で払い、愛車を駐輪場からゆっくり引き出し、ドスンとまたがった。

左手でリアブレーキレバーを引き、右手の親指でスタータスイッチを押すとブルル〜ンシュルシュルと軽やかなエンジン音が響いた。以前は、中古のスズキアドレス125に乗っていたのだったが、アドレス125のエンジンのかかりが悪いと安田に悔やんだところ、プラグを交換すれば問題ないということだったが、どういう風の吹き回しかわからなかったが、安田が乗っていた新車同然のアドレス110を譲ってくれた。

平均時速約50キロで国道202号を走ると10時55分にさしはら旅館の駐車場に到着した。玄関まで駆けていくとフロント前のティールームで安田が能天気なコーヒーをすすっていた。早速、安田の前に腰掛けると鳥羽は、勢いよく声をかけた。「先輩、お元気そうですね。今日は、改まってなんですか？」安田は、グラスから手を離し、首をかしげ話し始めた。「まあ、何というか、将来のことというか、就職のことというか、まあそんなところなんだが、自分で決めることだとは思いますが、ちょっと、鳥羽の意見を聞かせてもらいたいと思ってな」鳥羽は、いつもになく深刻な話しぶりに緊張してしまった。「何か、困ったことでも起きたのですか？さしはら旅館の経営がうまくいっていないのですか？僕にできることだったら、何でも言ってください。できるといっても、皿洗い、掃除、洗濯ぐらいですが。もしかして、もしかして、浮気がばれて、追い出されたとか？」

相変わらず、バカな妄想をする奴だとあきれたが、相談したいことは、そんなことではなかった。「いや、そういうことじゃなくて、就職先のことなんだ」鳥羽は、言っている意味がよくわからなかった。卒業後は、さしはら旅館の亭主になるわけだから、就職先で悩むというのではなく、仕事内容での悩みだと思えた。「就職先は、ここじゃないですか。どういうことですか？リノさんと喧嘩でもしたんでしょ。浮気なんかするからですよ。どこで、ナンパしたんですか、まったく」安田は、鳥羽の減らず口にうんざりしたが、心を落ち着けて返事した。「おい、俺は、浮気なんかしない。変な勘繰りはよせ。鳥羽には、黙っていたが、卒業後は、外資系の会社に就職する。カツラAIシステムズという会社だ。だから、旅館の亭主にはならないってことだ」

なぜ、さしはら旅館の亭主にならずに就職する気になったのか聞くことにした。「え、就職するんですか。また、どうして。この旅館は、どうする気ですか？リノさんは、了解したんですか？先輩は、旅館の亭主が似合っていますよ。もしかして、リノさんに捨てられたとか？リノさんの肩をもむとか、足をもむとか、リノがいなければ、僕は生きていけないと言って足にしがみつくとか、まだ間に合います、土下座して謝れば、許してくれますよ」これ以上妄想されては、極悪人にされてしまうと思い、安田は、具体的な話をすることにした。「おい、俺の話を聴け。リノとは、うまくいってる。そういうことじゃなくてだな～～。俺の相談は、職場のことだ。職場というのが、イスラエルなんだ。まさか、卒業してすぐに、行かされるとは思っていなかった。まあ、1年間の研修ということなんだが」

イスラエルと聞いてイサクのことを思い出した。「イスラエルにですか。もしかして、カツラAIシステムズは、イサクの紹介ですか？」ちょっと気まづくなった安田は、頭をかきながら返事した。「いや、イサクじゃなくて、ヤコブだ。仕事としては、やりがいのある仕事だと思い、就職することにしたんだが、卒業して、いきなり、イスラエルとは、面食らった。いや、イスラエルでもシリアでも、行く気はあるんだ。一度、決めた仕事だ、後悔はしていない。まあ、ちょっと、鳥羽に話したかっただけだ」鳥羽は、首をかしげて、考え込んだ。ヤコブの紹介ということは、何か裏があるとにらんだ。ヤコブが安田にどんな話をしたのか興味がわいてきた。

ヤコブに誘われた魅力ある仕事について聞いてみることにした。「先輩、さしはら旅館より、魅力ある仕事って、どんなんですか？給料ががべらぼうにいいとか？」安田は、苦笑いしながら、返事した。「まあ、それもある。でも、それだけじゃない。日本のためになる仕事だと思ったからだ。今、若者は、貧困と不当労働に苦しみ、自殺者が増えてるというじゃないか。今の政府に頼っていては、若者はみんな殺されてしまう。そう思わないか？ヤコブが紹介してくれたカツラAIシステムズは、九州にAIベンチャー企業を建設し、優秀な若者にチャンスを与えるというものだ。また、日本人だけでなく、イスラエルの若者もやって来るという。そこで、俺たちに、日本とイスラエルの懸け橋になってもらいたいというんだ」

腕組みをして聞いていた鳥羽は、もっともらしい話にうなずいたが、俺たちという言葉に引っかかった。「先輩、俺たちって、ほかにだれか？」安田は、ニコツと笑顔を作り、返事した。「九学連の三島だ。ヤツも一緒に誘われた。そこで、二人で話し合い、いい条件だということで、入社することに決めたんだ。三島は、母子家庭だろ。当初は、警察官志望だったんだが、母親の老後のことを考えると、すこしでも給料がいいところに、就職したいそうなんだ。でも、三島も、日本の若者のためになるならばと思い、カツラAIシステムズに決めたんだ。気持ちは、俺と同じだ」鳥羽は、コクン、コクンと何度もうなずいた。一呼吸おいて鳥羽は返事した。「なるほど、若者のためですか？確かに、AIベンチャー企業は、早急に求められている。それは、わかります。僕も、賛成です。でも・・・」

安田は、鳥羽の顔を覗き込んだ。でも、とはいったいどういうことなのか、気にかかった。「おい、でも、ってどういうことだ。いいことじゃないか。やりがいのある仕事だと思うが。何か、引っかかることでもあるのか？」鳥羽は、ヤコブが二人を誘った理由が気になっていた。カツラAIシステムズといえば、外資系の超一流の企業。F大のアホが就職できるところではない。それなのに、なぜ、ヤコブは、二人を誘ったのか？何か、不吉な予感がした。「いや、国際的な超一流企業に就職するわけですから、すごいことですよ。T大卒でもなかなか入れないと聞いています。頑張ってください。もう、入社試験は、合格したんですか？内定もらったんですか？」

安田は、ちょっと不安になった。ヤコブから、就職を勧められただけで、入社試験も面接も受けていなかった。だから、当然、内定通知も貰っていなかった。もしかしたら、騙されていたのではと思った瞬間、安田の顔から血の気が引いた。だが、確かに、ヤコブはモサド採用を約束した。そうか、俺たちはモサドに採用されたのであって、カツラAIシステムズに採用されたのではない。そのことに気付いた安田は、鳥羽にはモサドのことを話すことにした。万が一、親友に話したことで採用を取り消されたならば、それでもいいと思った。というのも、なんとなく不吉な予感がした。また、万が一、何かあった時、助けてくれるのは鳥羽しかいないように感じたからだ。

顔を引きつらせた安田は、ゆっくりと話し始めた。「そうか、入社するからには、入社試験も面接もあるよな。俺たちは、まったく、そんなものはない。ヤコブの言葉を信用しただけだ。しかも、今、思い出してみると、俺たちを採用するのは、カツラAIシステムズではなかった。モサドだ。俺たちは、モサドに採用されたんだ。そうだよな、超一流企業に三流大学の俺たちアホが入れるはずがない。鳥羽、そういうことだ。ヤコブは、俺たちをモサドに採用すると約束したんだ」鳥羽は、事情がつかめ、疑問が解けた。ヤコブは、二人をモサドに引き込んで何をさせるつもりなのか？鳥羽の心は、不安でいっぱいになった。「先輩、モサドに、本当に、入るつもりですか？モサドはイスラエルのスパイ組織ですよ。そんなところに入って、大丈夫なんですか？命を狙われることだってあるんですよ」

安田の全身に震えが走った。モサドはスパイ組織。命を狙われる。そう思った瞬間、やはり、判断を間違っていたような気になってしまった。でも、俺たちは、承諾してしまった。特に、三島は、お金のためなら、何でもやるといっていた。三島は怖気着いて、引き下がることはないだろう。俺も、いまさら、怖くなったからといって、三島がやる限り、引き下がるわけにはいかない。しかも、モサドの話は、俺が三島に持ちかけたのだ。リノには、申し訳ないが、もはや、後には引けない。安田は、自問自答するように、つぶやき始めた。「そうだよな。スパイであれば、万が一、発覚して捕まれば、拷問にかけられる。拷問の挙句、殺される場合もある。でも、二人で決めたことだ。後には、引けない。鳥羽、万が一のことがあったら、助けに来てくれるか？」

鳥羽は、即答できなかった。たとえ、親友といえども、助けに行くということは、自分もやられることになる。軽はずみな返事はできなかった。しばらく黙っていると安田が話し始めた。「いや、悪かった。自分の始末を親友に頼むとは。俺もどうかしている。バカなことを言ってしまった。今言ったことは、忘れてくれ。俺たちがモサドに入ることは、他言してはいけないことになっている。鳥羽、モサドのことは、きれいさっぱり忘れてくれ。今日の俺は、どうかしている。いったい、どうしたっていうんだ」鳥羽は、安田の気持ちがよく分かった。モサドに入ることに恐怖が起きたに違いない。これは、当然のことだ。三島は、お金が必要だといっていた。おそらく、安田が引き下がっても、三島は引き下がらないように思えた。安田は、そのことを察して、三島と心中する覚悟を決めたに違いない。

鳥羽は、二人が危機に陥ってもどうすることもできないと思ったが、何か、アドバイスはできるように思えた。「おそらく、万が一捕まれば、拷問は覚悟したほうがいいです。モサドは、CIA、KGB、MI6のどこよりも、仲間を大切にすると聞いています。でも、必ず、救出されるとは限りません。僕は、何もできないと思います。ただ、先輩にアドバイスはできるように思います。でも、先輩とやり取りすれば、先輩が機密情報を漏らしたことになる。そうなれば、裏切者として、モサドに消されるかもしれません。僕は、どうしたらいいんでしょうか？先輩のお役に立ちたいとは思いますが」

安田は、顔をしかめ、今にも泣きそうな表情になっていた。「いや、本当に、浅はかだった。俺たちのようなアホにスパイなんかできるはずがない。いったい、どうして、ヤコブは俺たちをモサドに引き入れたんだ。意味が、さっぱり分かん。要は、捨て駒ということか。そんなことにも気づかないなんて、ホンマ、アホやな。お金に目がくらんだ俺たちは、バカだった。でも、俺は死にたくない。こうなったらやけくそだ。俺は、鳥羽のアドバイスを受ける。万が一、発覚した時は、その時だ。三島も俺の気持ち、わかってくれるだろう。鳥羽、俺たちに知恵を貸してくれ。今のままでは、おそらく、俺たちは、やられる。腹は、決まった。頼む、鳥羽」

鳥羽は、返事に少し躊躇した。確かに、二人は捨て駒に違いないと思えた。おそらく、ここという時に、モサドは二人を捨て駒として使うに違いない。先輩を見殺しにはできない。鳥羽も腹を決めた。「わかりました。先輩を見殺しにはできません。でも、いったい、どうやって、先輩と連絡を取るかです。電話やメールでは、すぐに発覚します。それと、三島さんには、先輩と僕のことは黙っててください」安田は、少し気持ちが落ち着いたのか、ホッとした表情で返事した。「そうだな。このことは、鳥羽と俺の秘密にしておこう。三島は、びくつかなくてすむ。もし、危険な任務に就いた場合、どうやって、鳥羽にそのことを伝えるかだ。慎重にやらないと、コレだからな」安田は、右手の親指で首を切る仕草をした。

鳥羽も絶対にバレない連絡方法を考えることにした。「そうです。まだ時間はあります。じっくり考えてみましょう。ところで、リノさんには、イスラエルでの研修のことは伝えたんですか？」安田は、顔をしかめて返事した。「それがだな～。まだなんだ。それに、リノのヤツ、妊娠したみたいなんだ。困ったな～。妊娠が本当だったら、出産は、4月か、5月ってことだろう。まだ、出発時期は、はっきりしてないんだが、1年間、イスラエル研修に行くと言ったら、どう思うだろうか。いや～～、困った」鳥羽は、安田の優柔不断な気持ちが気にかかった。「先輩、モサドは、スパイです。感情に流されるようじゃ、判断ミスをして、即、やられてしまいます。リノさんには、モサド入隊の了解は取っているんでしょ。ならば、はっきりと、言わなければなりません」

安田は、これからモサドになることを改めて気づかされた。万が一、リノに反対されるようだったら、きっぱりと、モサドを断ることにした。三島には悪いと思ったが、リノに反対されてまで、モサドにはなりたくなかった。「わかった。今、はっきりというべきだな。アドバイス、ありがとう。さすが、鳥羽。リノは、日本救済のモサドの仕事には賛成してくれた。俺よりも男らしい。大したもんだ。万が一、俺がやられたら、リノと再婚してくれ。鳥羽だったら、許す」目を丸くした鳥羽は、即座に返事した。「何、バカなことを言ってるんですか。死ぬなんてことは、考えてはいけません。とことん、生き抜くんです。それに、リノさんは、僕にはムリッス」安田は、ワハハと笑い声をあげて、氷が解けて水っぽくなったコーヒーを一気に飲み干した。

AI脳実験

8月6日（火）広島原爆の日。夕食後、キッチンテーブルで向かい合ったイサクとヤコブは、いつものAI脳についての雑談を始めた。イサクは尋ねた。「AI搭載は、頭頂葉が最適なのか？」ヤコブは首をかしげて返事した。「今のところ、頭頂葉が最適だと考えている。左右の海馬をAIにすることも考えたが、まずは、頭頂葉にAIを設置し、海馬と間脳に電気信号を送り、グリア細胞活性化のテストをすることにしている。しかし、当初考えていたより、かなり、やっかいだ」イサクは自分の意見を述べた。「やはり、無理があるんじゃないか。AIを設置できたとしても、AI信号は人間のニューロンに適合しないと思うんだ。シナプスの伝達物質は、単なる電子ではないんだろ。しかも、あまりにも複雑だし」

腕組みをしたヤコブが一度うなずき返事した。「確かに、その通りだ。AIからニューロンへの電気作用は、今のところ、実験を繰り返さないと何とも言えない。だから、まずは、AIでグリア細胞を活性化させることにしたんだ。つまり、第一段階として、AIを使って海馬と間脳に電気信号を送る。これによって、グリア細胞を活性化させる。グリア細胞は海馬をさらに活性化させる。活性化された海馬が大腦皮質を高度に機能させる。これに成功すれば、第二段階として、左右の海馬にAIを設置し、AIデータを利用できる大腦皮質を形成する。今は、第一段階を成功させることが目標だ。まずは、エージェントAI脳を作り、次に、科学者AI脳をつくる」イサクは、AI脳の実現がまじかに迫っているように思えて笑顔を作った。「なるほど、まずは、エージェントAI脳だな」

ヤコブは、話を続けた。「そうだ。第一段階の実験では、今言ったように、AI頭頂葉から海馬と間脳に電気信号を送る。それによって、グリア細胞の機能を高める。結果的に、大腦皮質の高度機能につながる。何ととっても、本来、人間が持っているグリア細胞を最大限に活用することが、脳機能には不可欠だ」イサクは、笑顔で返事した。「なるほど、ヤコブがいつも口にしていうグリア細胞の最大活用だな。面白そうだな」ヤコブが、身を乗り出し、話し始めた。「そうさ。なんといっても、まずは、グリア細胞の活用だ。ニューロンとグリア細胞は相互に作用しあって、脳は高度に機能するんだ。問題は、実験だ。モルモットが必要となる。しかも、猿やオラウータンではだめだ。人間モルモットが必要だ」

イサクは、目を丸くして話し始めた。「人間モルモットか。そうだよな。AI脳は、人間でなければ、実験の成果がわからない。でも、人間を実験に使うとなると、厄介なことになるんじゃないか？」ヤコブがうなずいた。「そうなんだ。しかも、だれでもいい、というわけにはいかない。実験効果が、確認できるような人間でなければならない」イサクが質問した。「それじゃ、いったい、どんな人間がいいんだ？」ヤコブは、目を輝かせ返事した。「大学生がいい。いろんなタイプの学生を実験してみたい。でも、実験の最初は、失敗が起きる可能性は高い。そこが、問題となる。脳に損傷が残れば、知的、精神的障がい者になってしまう。でも、人体実験には、犠牲者はつきものだ」

神妙な顔つきになったイサクは、尋ねた。「もしかして、あの二人を実験に使うつもりか？」ヤコブは、ゆっくりうなずいた。「もちろんさ。そのために、二人をモサドにしたんだ。二人を優秀なAI脳モサドにするつもりだ」イサクは、小さな声で尋ねた。「もし、失敗したら？」ヤコブは、唇を右上に引き上げ、返事した。「失敗しないことを祈るだけだ。いや、二人の場合、失敗するわけにはいかない。モサドだからな。そう、心配するな。今の段階では、成功率70%だ。きっと、成功する。成功した暁には、あのアホの二人も、秀才エージェントになれるってことだ。実験が楽しみだ。でも、彼らの実験の前に、数人の実験は必要だ」

イサクは、うなずき返事した。「そうか。失敗しても構わない人間モルモットが必要なんだな。僕が、連れてくるということか？」ヤコブが笑顔で返事した。「いや、イサクの手を煩わせるようなそんな実験はしない。実験場所と人間モルモットは、準備できている」イサクが、首をかき上げて尋ねた。「いったい、どこで？」ヤコブはニコツと笑顔を作り返事した。「イサクもよく知ってる場所だ。精神病院さ。そこなら、失敗しても、精神病の悪化ということで、うまく処理できる」目を丸くしたイサクは、大きくうなずいた。「なるほど。精神病院か。今、世界的に、うつ病の学生は多い。実験用人間モルモットが、向こうからやってくるってことか。これはいい。さすが、ヤコブ。そこなら、失敗しても、だれも文句は言わないだろうな」

イサクの顔が、一瞬曇った。「万が一、裁判沙汰になりそうだったら？」ヤコブが、ドヤ顔で話し始めた。「そうだな。脳損傷隠ぺいのために、植物人間にして、死ぬまで入院させればいい。まあ、いざとなれば、お金で解決できる。親族にとっては、厄介者が減って、金が手に入るんだ。喜んで、金もらって帰るさ。精神病院とは、そんなところさ」イサクは、顔をブルブルと左右に振った。「恐れ入った。AI脳の実験は、ヤコブに任せるよ。俺には、気味が悪くて、ついていけない」ヤコブは、一つうなずき話し始めた。「AI脳の実験は、倫理に反する場合もあるが、脳医学においては大きな意義を持つんだ。おそらく、君は、このAI脳実験は、秀才をつくための実験だと思っているだろう。でも、それだけではないんだ。精神病治療にも役立つんだ」

イサクは、精神病の治療に役に立つと聴いて、ちょっと、ホッとした。「AIで精神病が良くなるというのか？」ヤコブは、大きくうなずいた。「そうだ。精神病は、今のところ、不治の病さ。不安を取り除くために、精神安定剤を処方しているが、実は、その薬というのは麻薬なんだ。だから、これは、治療とは言えないんだ。もし、AIによるグリア細胞の活性化ができれば、ニューロン機能の活性化が可能になる。そうなれば、精神も知能も通常以上のレベルに回復する可能性が出てくる。だから、あえて、グリア細胞にこだわっているんだ」ヤコブはAI兵器科学者ではあったが、AIを使った精神病治療をも考えた実験を試みていた。初めて、そのことをイサクに打ち明けた。

イサクは、安田と三島について話し始めた。「安田に、イスラエル研修の話をしたんだろ。面食らっていただろう？」ヤコブは苦笑いしながら返事した。「安田のヤツ。意外と肝っ玉が小さいな。卒業早々、イスラエルと聞いて、泡吹いてた。まあ、無理もないが、鉄は早いうちに打て、というからな」イサクがうなずいた。「確かに。でも、あの二人、モサドの過酷な研修に耐えられるだろうか？1日で脱走するんじゃないか？三島のほうは、剣道をやっているから、どうにか耐えれそうだが」ハハハとヤコブの笑い声が響いた。「まあ、いいさ。あくまでも人間モルモットにするのが目的だから、脱走しない程度に、しごいてくれ、と本部にはお願いしているから」

イサクがちょっと安心した表情で話し始めた。「それはよかった。マジ、二人は脱走するんじゃないかと、心配していたんだ。頭脳はないが、安田には、学生運動家としての知名度がある。日本の学生を勧誘する場合、安田は大いに役に立つ。まあ、大目に見てあげていいんじゃないか。安田は、頭も体も鍛えるようなレベルじゃない。モサドの心構えをみっちり叩き込んでもらえればそれでいい。三島は、バカだが、お金のエサでハイハイと指示に従う忠犬だ。あの二人、意外と、お買い得だったかもしれんな」大きくうなずいたヤコブだったが、安田のことが気になっていた。「三島は、お金で使える。でも、安田は、ちょっと気にかかる。安田は、同棲している相手がいて、卒業後、すぐに結婚するといっていた。問題は、結婚相手だ。ややこしいことにならないければいいが・・・」

イサクは安田と鳥羽の関係が気になっていた。「確かに。イスラエル研修にどう返答してくるかで、安田の気骨がわかる。そのことより、安田は、鳥羽と親友であることが気にかかる。安田は、鳥羽にモサド入隊について話しているような気がする。ヤコブは、どう思う？」ヤコブは、首をかしげて、しばらく考え込んだ。「そうだな～。安田は、ちょっと、口が軽いところがある。う～～、話している可能性が高いな。でも、三島はいつ切ってもいいが、安田は、今のところ、必要だ。まあ、いいさ。安田には、当分の間、学生勧誘に専念してもらおう。AI脳実験とAI兵器研究に関する機密情報は流さない。心配することはない。万が一、裏切れば、おきてに従ってもらうだけだ」

禅

三島は、市営住宅の一室で壁に向かって座禅し、心静かに将来のことを考えていた。モサドになることに不安がないといえば嘘であった。でも、高額報酬のことを思えば、モサド入隊を断る気は全く起きなかった。当然、母親には、モサド入隊のことを伝えることはできなかった。モサドの身分は、家族であっても知らせることができなかった。だから、母親には、カツラAIシステムズに就職が決まり、そして、卒業後、1年間のイスラエル研修があることを伝えることにした。三島としては、嘘をつくことは、後ろめたかったが、今回ばかりは、本当のことは言えなかった。三島は、これでいいんだ、これでいいんだ、と何度も心で繰り返した。

モサドであっても、結婚は許されるが、モサドの身分は伏せなければならなかった。三島は、峰岸と結婚したかった。でも、相手には、一生、嘘を突き通さなければならぬことになる。こんな、結婚生活で、うまくやっていけるのだろうか？こんな疑問がわいたが、嘘が嫌なら、結婚はできない。嘘について、結婚する以外ない。モサドでは、殉死すれば、家族は一生涯生活が保障される。そのほかにも、生命保険に入っていれば、お金だけでも、償いができる。これで、勘弁してもらおうことにした。三島は、恐る恐る、予想していた。”俺たちには、生死にかかわる任務を負わされる、と。”死を覚悟で、モサドになる以外ない。母親にも、峰岸にも、将来産まれてくるだろう子供達にも、嘘をつき通して死ぬことになる。これは、自分の運命として割り切ることにした。

お金にこだわらず警察官の道を歩むこともできる。あえて、危険な道を選んでしまった。それは、やはり、お金だけではない、日本の若者の未来のためだ。今の政治が続けば、若者は犬死していく。優秀な若者だけでも、九州に集め救済すべきだ。もはや、日本という国家は、無きに等しい。若者は、日本にこだわっている場合ではない。ヤコブが言うように、ヤマト・ヘブル国家を建国し、日本の若者は、イスラエル人と協力し合い、生き延びるべきだ。いずれ、本州は廃墟となる。一刻も早く、優秀な若者を九州に移住させなければならない。西日本で原発テロが起きてからでは、手遅れになる。九州がテロに合わないという保証はどこにもないが、今のところ、CIAの情報を信じる以外ない。

静寂の中に小さな足音が近づいてきた。ドアの開く金属音とともに母の疲れた声が響いた。「帰ったよ」三島は、目を閉じたまま、大きな声で返事した。「おかえり～」耳に入ってくる音から、三島は母親のいつもの動作が想像できた。キッチンテーブルに落とされる荷物のガサガサという音。スリッパのかすれた音。フレッジが閉じるパタンという音。引きずられる椅子の足のズ～～という音。「ナニ、やっとする」母の疲れた声。三島は暗闇から出ることにした。「今行く」と即座に返事して、立ち上がり6 畳の部屋から出た。「今日は、弁当を買ってきた。疲れて、作る気せん」母親は、ここ最近、帰ってくるなり、疲れた、というようになった。三島は、お茶を入れることにした。お茶を差し出し、三島は向かいに腰掛けた。「再来年は、就職できる。もう、内定もらった」

母親の目がピカッと輝いた。「内定？警察官の？」ニッコと笑顔を作り、顔を左右に振った。「違う。外資系のAIベンチャー企業。結構、給料がいい」母親は、外資系といわれ、ふに落ちなかったが、軽くうなずいた。「へ～、こんなに早く。どんなとこね、どこにあるとね」一瞬説明に戸惑ったが、心配をかけないような説明をすることにした。「今は、内定が早いんだ。外資系といっても、支店は、九州にある。でも、卒業後、1年間は、イスラエルで研修がある。頑張るけん」イスラエルと聞いた母親の顔は、一瞬引きつった。「イスラエル？ホ～、剣道しか能がないのに、よう、外資系に入れたもんやね。どんな仕事するん？」三島も具体的なことは知らされていない。当たり障りない言葉を並べることにした。「まあ、よく言う営業。新製品の売り込み。そんなとこ」

母親には、ピンとこなかった。でも、就職が決まったことにホッとした。「よくわからんけど、内定もらえて、よかった。人生は、剣の道と同じ。しっかり自分の心に耳を傾けていたら、間違いはない。自分で選んだ仕事だったら、それでよか。仕事に、成功も、失敗もない、自分の気持ちを大切にすればよか。いえることは、それだけ。剣を捨てても、心の剣は、きっと、いざという時、助けてくれる」イスラエルと聞いて、母親はおどおどするのではないかと思っていたが、落ち着いた母親の言葉を聞いて、三島は安心した。「俺が、働くようになったら、仕事を減らして、無理せんでよか。生活費、入れるけん」母親を気遣う言葉を聞いた母親は、ニコッと笑顔を作り、お茶をすすった。

母親は、肩の荷が下りたようで、疲れていた気分が、少しずつ薄れていくのを感じた。気分がよくなったついでに、先日、連れてきたガールフレンドをほめることにした。「この前の、ちびっこい、警察官の彼女、なかなか、気が利いて、いい子やった。結婚するとね」突然、結婚を持ち出され、顔が固まった。「ああ、あの子。まあ、まだ、先のことは、まだ、考えてない。中学からの友達、ってところやから」母親は、話を続けた。「結婚は、気が向いたときにしたらよか〜。何も、親のことは心配せんでよか。あの子は、素直で、剣の心を持つとる。見どころがある。あの子だったら、申し分ない」母親は、一目見て峰岸を気に入っていた。

三島も結婚したいとは思っていたが、とりあえず、1年間の研修を終えて、具体的な結婚準備の話をしようと思っていた。今のところ、モサドの過酷な研修を無事に終える自信がなかった。万が一、脱落すれば、どうなるのだろうと不安に駆られていた。「まだ、結婚は、先の先の話。それより、ムリせんように」母親は、自分のことを気遣って給料の安い警察官をあきらめ、剣の道を捨てたのではないかと気がかりだった。ガツンとハッパをかけることにした。「来年こそ、日本一にならんと。まだまだ、心にスキがある。もっと、心に向き合わんと。一瞬のチャンスは、考えてわかるものじゃない。心が教えてくれる。心が体を動かしてくれる。初心に帰って、死ぬ気でけいこせい。九州一ぐらいで、天狗になったら、天国の父さんが悲しむ。死ぬ気で、日本一になれ」

これ以上話をしてると夜中まで説教されると思い、話を切り上げることにした。「わかった。来年は、優勝する。ちょっと、やることもある」三島は、腰をあげた。部屋に戻った三島は、座禅の続きを始めた。確かに、俺は、なぜか、心にスキができる。集中力が、ふと、切れるときがある。俺には、勝つ気持ちが足りないのか？何が、足りない？間合いか？気合か？勇気か？三島は、自問自答した。一つわかっていたことがあった。それは、勇気が足りないことだった。相打ちを恐れるところがあった。一瞬の恐怖を克服できないでいた。無謀に打ち込めば、相手の思うツボだ。相手のメンを待つべきか？メンを打たせて、ドウを切る。来年は、最後。もはや、理屈はいらない。自分のひらめきを信じよう。心が教えてくれるはず。

峰岸のヤツ、イスラエルに研修に行くといったら、なんというだろうか？意外にも、ついてくるといったりして。峰岸の気持ちが気にかかった。全九州学生での優勝、就職内定、幸運が転がり込んできたことで、三島は有頂天になっていた。そのノリで峰岸との恋愛も峰岸路線に乗ってしまった。うかつにも、峰岸との結婚を約束したのだった。後になって考えると、早まったことを言ってしまったと後悔したが、峰岸の喜ぶ笑顔を見ると何も言えなくなった。しかも、セックスまでしてしまった。約束を破る気はなかったが、モサドになることを考えると、気が重くなった。最近、峰岸の笑顔がちらつき、けいこにも身が入らなくなっていた。このままでは、日本一どころか、九州大会でも危うくなりそうだった。決して、峰岸との結婚に不安があるわけではなかった。結婚を望んでいるからこそ、モサドになることが不安になるのだった。

これから、日本はどうなるのだろうか？東日本フクシマ原発テロの次は、西日本原発テロか？其れとも、九州原発テロか？ますます、貧困化が進み、軍隊ができ、若者は軍人になっていくのか？今の政治が続けば、若者は犬死するに違いな。これでいいのか？とにかく、九州だけは守りたい。イスラエルの力を借りてでも、若者が、新しいヤマト・ヘブル国家を作ればいい。きっと、安田先輩も、そう、思ってるに違いない。安田先輩、イスラエルでの過酷な研修に耐えられるだろうか？万が一、研修に耐えられず、脱走したら、モサドに入隊できなくなるのだろうか？

俺はどうか？剣道をやっているからといって、研修に耐えられるとは限らない。英語もろくにできない俺に、ヘブライ語の勉強ができるか？ユダヤ教がわかるのか？イスラエルの歴史を覚えれるのか？AI理論がわかるのか？一週間の絶食に耐えられるのか？50キロのランニングに耐えられるのか？軍事訓練に耐えられるのか？武器の使い方をマスターできるのか？ボクシングの特訓に耐えられるのか？複雑な暗号を覚えれるのか？10キロの遠泳ができるのか？10分間息を止めて素潜りができるのか？俺こそ、1か月間で、脱走するのではないか？俺は、道を誤ったのではないか？剣道バカは、警察官になったほうが良かったのではないか？

今からでも、モサドを断るべきではないのか？今だったら、間に合うに違いない。俺が断るといえば、先輩も断るだろうか？でも、今の日本では、若者の犬死は目に見えている。犬死するのであれば、モサドになって、犬死したほうが、まだ、ましのように入る。CIA、KGB、AI6、彼らは、モサドの計画を知ったら、どう、対応してくるのか？モサドを攻撃してくるのか？俺ら、バカは、捨て駒に使われるだろう。覚悟はしている。先輩も同じに違いない。後には、引けない。ヤマト・ヘブル国家のために、やるしかない。

ふいにパンチを食らわすような着メロが、鼓膜に飛び込んできた。それは、峰岸からのラブコールだった。三島は左横に置いていたスマホを手にとると返事した。「はい」即座に、峰岸の甲高い声が伝わってきた。「今、何してる？次のデート、どこ行く？」峰岸は、自分のことしか考えていないように思えて、少しムカついたが、返事した。「デートか～？盆前の連休はダメだけど、峰岸が行きたいところがあったら、付き合うけど」即、返事が返ってきた。「うれしそうじゃないみたい。私以外にいるってことはないわよね？信じてはいるけど」全く、嫌味なことを言うヤツだと思ったが、軽く返事した。「何度も言うけど、峰岸以外は、だれもつきあっていない。時々声をかけられるのは、俺のファンだといったじゃないか。いい加減にしてくれ」

ちょっと安心した峰岸は、予定を伝えた。「そいじゃ～、七ツ釜に行こう。三島は、行ったことある？」三島は、まだ行ったことがなかった。「いや、どこにあるんだ、七ツ釜って？遠いのか？」笑顔を作った峰岸は返事した。「佐賀。ちょっと遠いけど、日帰りできる距離だから。佐賀方面には、新鮮な魚介類のおいしいレストランがたくさんある。そこで食事しよう。そいじゃ～、18日の日曜日はどう？何時に迎えに行こうか？」早めに出立したほうがいいと思い、いつもより早めにの時間を伝えた。「佐賀だろ～、それじゃ、8時には出発したほうがいいような」即座に、弾んだ声の返事が返ってきた。「OK.そいじゃ、18日の8時。待ってて」峰岸は、チョ～極安の中古の軽自動車が欲しいとリノにお願いしたところ、リノは、峰岸の事情を安田に話した。ちょっと男気を出した安田は、試乗車に使っていたスズキ・ラパンをただ同然で峰岸に譲った。ピンクのラパンを手に入れた峰岸は、浮気防止も兼ねて、度々、愛車でデートに誘っていた。

決断

8月10日（土）ハットの日。ゆう子は久しぶりに美緒に会えるのを楽しみにしていた。校長にイスラエル留学生のことを話したところ、彼らはモサドの可能性があるといわれ、できれば、もっと、詳しい情報をとるように、と言われていた。イサクともっと深く付き合えば、彼らの素性や仲間たちについての情報を手に入れることができる。でも、セックスしてしまえば、彼女として付き合うことになる。ゆう子の心に不安が渦巻いた。”白人イスラエル留学生を嫌っている安田や鳥羽の反感を買うのではないか？また、本当にイサクを彼氏にして、後悔しないか？勇樹のことを忘れることができるのか？万が一、妊娠してしまったら？”そんなことを考えていると頭がパニック、一人で悩んでいてもらちがあかないと、美緒のアドバイスをもらうことにしたのだ。

ミッキーの壁時計に目をやると午前10時になるところだった。美緒は、若干、時間にルーズだったが、もうそろそろやってくるに違いないと、ゆう子は1階に降りることにした。キッチンの椅子に腰かけるや否や、ピンポン・ピンポン・ピンポンと聞きなれたインターホーンが鳴った。美緒は、なぜか、せっかちな押し方をするのだった。「は～～い」とドアに向かって大きな声で返事すると、ゆう子は、玄関にかけていった。ドアが勢い良く開くと満面の笑みを浮かべた美緒の顔が現れた。「センパ～～イ、オミ～ヤ～～～」美緒は、CAKE HOUSE Tomitaとデザインされたグリーンの袋を手提げしていた。

ゆう子は、それが何かすぐにわかった。「気が利くじゃない。上がって」美緒はスリッパをはくとゆう子のあとについてキッチンに向かった。美緒は、テーブルの上にそっと袋を置いた。ゆう子は、食器棚からグラス2個、お皿2枚、スプーン2つ取り出し、テーブルに並べた。そして、フレッジからペットボトルジュースを手にとると席についた。美緒も腰掛けると尋ねた。「お母さんと詩織ちゃんは？」ゆう子は即座に返事した。「お母さんは、朝早くに、出ていった。詩織も、予備校で、夏期講習。パパは、昨日の夜から、大分に旅行」

美緒は、袋から白い箱を取り出し、蓋をそっと開けた。箱の中には、ティラミス、レアチーズ、イチゴ、マロン、抹茶、のショートケーキ5個が並んでいた。ゆう子が甲高い歓喜の声を響かせた。「ワ～～、おいしそう。5つも買ってきたの」美緒が笑顔で応えた。「お母さん、お父さん、詩織ちゃんの分も。先輩、好きなの取って」ゆう子は大好きなレアチーズを取り出した。美緒はイチゴを手にした。残りは、フレッジに入れた。小さなスプーンを手にした美緒が尋ねた。「詩織ちゃん、何年生？」ゆう子は即座に返事した。「3年、来年受験」美緒は、うなずき返事した。「どこ、受験するの？」首をかしげたゆう子は、曖昧な返事をした。「はっきり聞いてないけど、Q大に行きたいみたい。3年の初めは、東京の大学に行きたいって言っていたけど、お母さんが反対したみたい」

美緒は、口をモグモグさせイチゴを食べ終わると話を続けた。「へ～～。どうして？」首をかしげて返事した。「フクシマ原発に近づかないほうがいいって。ほら、関東は、放射能汚染が問題になってるじゃない。心臓病、白血病、が急増してるんだって。万が一のことがあったらいけないから、東京は、ダメって」美緒は小さくうなずいた。「なるほど。確かに。君子、危うきに近寄らず、ってことか。原発事故って、チョ～～、ヤバイよね。でも、詩織ちゃん、S高の秀才だし、どこでも合格だな」ゆう子は小さくうなずいて、返事した。「詩織は、お父さんの秀才遺伝子を受け継いだのよ。うらやまし～～」美緒が同情するように返事した。「ゆう子先輩も、頭いいじゃないですか。美緒は、どうなるんですか？パ～プリンのブ～～タン、ってことですか？」

吹き出しそうになったゆう子だったが、ニコツと笑顔を作って、返事した。「美緒は、特別よ。なんというか、予知能力があるというか、靈感があるというか、不思議な能力があるじゃない。もしかして、宇宙人？」ドヤ顔になった美緒は、胸を張った。「ア～～、ついに見破られたか。私は、アンドロメダからやってきた、予言者ブ～～タンです。これからも、ヨロピクブ～～」ゆう子は、ワハハハ～とついに嘔き出してしまった。ケーキを食べ終えた二人は、二階のゆう子の部屋に向かった。ベッド横の白い椅子に腰掛けた美緒は、尋ねた。「先輩、相談って？」ゆう子は小さな声で返事した。「何というか、友達というか、彼氏というか、イスラエル留学生の話。聞いてくれる？」

留学生と聞いて、美緒の目が輝いた。美緒は、白人のイケメンが好きだった。ゆう子は、どういう風に話そうかとしばらく考えていたが、いったい何を相談したいのかもわからなくなっていた。とにかく不安を話すことにした。「何といえればいいのかな～、今、イスラエル留学生の友達がいるの。イサクと言うんだけど。イサクとは、今のところ、単なる話し相手なんだけど、イサクともっと付き合っているものか？ちょっと悩んでいるの。どう思う？」いったいどういうことを悩んでいるのかピンとこなかったが、おそらく、外人とセックスしてもいいものか？という悩みだと判断した。「要は、友達じゃなく、彼氏にしたいってこと？」ズバリ、美緒の言う通りだった。「そう。イサクって、イスラエルの留学生じゃない。外人と付き合ったことないし、よくわからないのよ。付き合ってもいいものか、どうか？」

中年男性のことだったら、ドヤ顔で返事できたが、外人とは一度も付き合ったことがなかった美緒は、なんと答えていいかわからなかった。「外人ね～、美緒もつきあったことないし～。わかりまシェ～ン。先輩、思い切って、付き合ってみたら？」美緒の返事は、こんなものだろうとは、予想していた。「そうよね。イスラエル人と付き合ったことがある人って、身近にいないし。どうしよう～？」美緒が質問した。「そのイスラエル留学生って、日本語、話せるの？」ゆう子はうなずいた。「それが、びっくりするぐらい、上手。それに、チョ～イケメンだし。やさしくて、話も愉快だし、博学だし、さすが、選抜された国費留学生って感じ」

美緒は巨乳をグイッと押し上げ腕組みをすると大きくうなずいた。「わかりました。お答えします。付き合いなさい。きっと、うまくいくでしょう」マジな顔つきになり美緒はひらめきを話した。美緒の自信にあふれた回答をもらったものの、それでも、不安が残った。「別に、悪い人だとは思わないんだけど、ア～～どうしよう」何を悩んでいるかは、察しがついていた。美緒は、はっきりとやってやることにした。「先輩、セックスでしょ。いいじゃないですか。日本人でも、イスラエル人でも、セックスは同じ。気にしなくてもいいんじゃないですか。でも、避妊は、忘れないように」ズバリ核心を突かれ、ゆう子は目を丸くした。「でも、避妊といわれても、どうやればいいか？まだ経験ないし、ア～～」

確かに、初めてだと、避妊は難しい。避妊は、ズバリ、相手に言わなければ失敗する。でも、いざ、その時になって、勇気を出して、口にできるか？「先輩は、まだだもんな〜。だから、もっと早くに、やってればよかったんです。だったら、度胸もついていたのに。いまさら、こんなことを言っても、始まらないか」美緒もこればかりは、首をひねった。美緒は、許してもいいと思ったら、相手にセックスOKの時期をはっきりと伝えていた。だから、妊娠したことはなかった。「それじゃ、先輩から、デートの日を指定してください。それも、何日から何日までと。プレイボーイだったら、きっと察しが付くはずですよ。それが、いいです」ゆう子ほうなずいた。イサクとヤコブがプレイボーイであることは、間違いないと思った。基礎体温から、妊娠の期間をわりだすことにした。「わかった。日本人も、外人も、同じよね。美緒、ありがとう」

大きな目をパチクリさせた美緒は、笑顔で大きくうなずいた。実のところ、美緒は、イケメンのイスラエル人とセックスしたかった。誰か紹介して欲しくなった。「先輩、そのイスラエル留学生に友達いるでしょ。友達を紹介してくれませんか？美緒も、白人と付き合ってみたいな〜。お願い、先輩」まさか、美緒がこんなことを言い出すとは夢にも思っていなかった。イサクとこれからどうなるかわからなかったが、相談に乗ってくれた恩返しにだれか紹介しなければ悪いような気になった。だれかといっても、思い当たるのは、ヤコブしかいなかった。でも、ヤコブは、美緒のようなタイプを好むかどうか？巨乳だけど、チビデブでカワイ〜ってほどでもない。でも、ヤコブが決めることだし、紹介だけはしてみることにした。「え、友達？いることには、いるけど。ヤコブっていうんだけど、医学部の学生。一度会ってみる？」

美緒は、医学部の学生と聞いてワクワクしてきた。医科大学看護学科の学生だといえば、付き合ってくれそうな気になってしまった。「ぜひ会ってみたい。紹介して。いつ紹介してくれる？美緒は、いつでもいいんだから」とりあえず、イサクに話してみることにした。「わかった。イサクに聞いてみる。ヤコブがOKだったら、連絡する」美緒は、ジャンプして歓声をあげた。「やった〜。先輩、ありがとう」美緒の喜びが理解できなかった。そんなに、白人がいいのだろうか？黄色人種は、白人にあこがれるのだろうか？ゆう子は、別に、白人だから付き合いたいとは思わなかった。イサクと付き合うのは、白人だからというのではなく、やさしさと聡明さにひかれたからだった。

確かに、アジア人は白人と簡単にセックスする、というネット記事を目にしたことがあった。美緒も、その部類の軽い女子なのだろうか？白人とセックスするのが、自慢になるのか？名誉にでもなるのか？ハクがつくというのか？有頂天の美緒に尋ねた。「え～～、白人がそんなにいいの？日本人のほうがいいと思うけど」意外なことを言う女子だと思ったのか、美緒は眉間にしわを寄せ答えた。「イスラエル人って、やさしくて、上手なのよ。記事で読んだだけ、なんだけど。なんだか、あこがれちゃうのよね～～甘いマスクに」美緒の頭には、セックスのことしかないように思えた。

ゆう子は、嫌味を言ってやった。「美緒は、おじさん好みだったんじゃないの？今度は、白人。まったく、節操というものが無いんだから」顔を引きつらせた美緒は、反撃した。「節操がないって、どういうこと？セックス上手が好みって、言ってるだけじゃない。若いのは、やさしさも、ムードも、全くないんだから。その点、おじさんはいいのよね。イスラエル人の甘いセックスも味わいたいな～～、シンデレラになれるかも～」話を打ち切ろうと思ったが、ガツンとショックを与えることにした。「噂ってのは、嘘が多いっていうから、ガッカリするかもね。見掛け倒しかも」急に、マジな顔つきになった美緒が、言い放った。「だから、自分の体で確かめたいの」

ゆう子は、言ってる意味がさっぱり分からなかった。イスラエル人がセックス上手かどうか、確認して、どうなるというのか？ヤコブのセックスが、美緒が思っているほど上手でなかったら、だれに、何と言うつもりなのだろうか？”あんたは、セックス評論家？セックス体験記でも書くつもり？イスラエル人の次は、フランス人とでもセックスする気？”と言ってやりたかったが、アホらしくなった。ゆう子は、美緒がモテるのは巨乳だからと思っていた。「美緒、恋愛というのは、セックスだけじゃないと思うけど」美緒は、目を丸くした。「いつ、セックスだけって言った。セックス上手が、好きだって、言ってるだけよ。先輩は、一度も経験がないから、わからないだけ。経験すれば、わかるって」

セックスのことを言われると、今までの恋愛は何だったのだろうと思い始めた。セックスできなかった勇樹への片想いは、いったい、なんだったのか？無駄な時間を過ごしたに過ぎないというのか？イサクに対して好感を持っているが、これは恋愛感情といえるのか？イサクとセックスすれば、それは、恋愛なのか？ゆう子には、納得がいかなかった。イラッと来たゆう子は、顔をしかめ、頭をガシャガシャガシャとかきむしった。シャワーを浴びて、頭をスッキリさせることにした。「久しぶりに、シャワー、浴びようか？」美緒は、笑顔で答えた。「来るまでに、汗びっしょり。シャワー浴びた～～い」二人は、1階のバスルームに向かった。